

ガビン先生と

楽しく学ぶほう

「日本の古典文学」

表編 + ちよとらご話

令和五年夏

第二回

令和五年七月二十八日 金曜日

十時〜十一時三十分

共済会合市氏センターにて

伊藤雅敏

おひさ

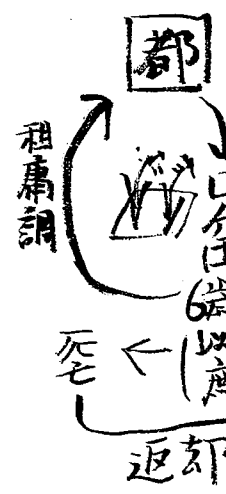


令和元年からの話

))))))

税

701 大宝律令 公地公民 入班田收授の法 ↓ ↑ 土一揆 ウソの申告 男1割 女9割



租庸調

少丁 17歳 ~ 20歳
正丁 21 ~ 60
老丁 61 ~ 65 (返丁)

租

租の3%

田由段に
稲2束
2把

庸

年間10日労役

34貫
布 or 糸8両
綿1斤
布2丈6尺
800反物
都で10日間労務

調

特産品

都までの運搬
自腹(女道費)
△食其費
+ 労役
副産物
染糸料
胡麻油

男のみ
~~女子~~

1000年頃まで続く

都 庸・調

歳役 都で10日以上 労役

衛士 都で1年

防人 九州で3年

免除 僧侶 女子

国(地方) 租(租)

公出挙

稲の差別貸付
利息5割
義倉

粟などの実
米貯倉
飢饉に備える

兵役 国所で60日以上
雑徭
各地で10日

仕丁

790年以降 荘園の拡大

麗妙能 あらたへの

布衣遠陲尔 ぬのきぬをだに

伎世難尔 きせかてに

可久夜歎敢 かくやなげかむ

世牟周弊遠奈美 せむすべをなみ

粗末な

布の服さえ

着せてやれはくす

こころも嘆くことか

どうすることもできず

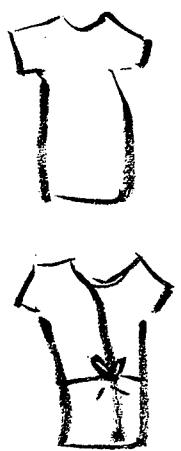
あまのこ 共栲

こぎ 楯の織物で作らるる着物
織り目の粗い織物

ぬのきぬ 布肩衣 粗末の衣服

まへへ 衿

だにこころめてとたげさむ
しーに



山上憶良 74歳

官吏を辞す

長年の閑病生活

病床のゆびせの中を思う煩う

特に貧しい家庭の中の子

いぢけな子どもたち

必短歌の前

豊かき家の子 須綿の着物を着すべし

← すすむる 一ぢけな子どもたち

貧しい家の子 着る物もない

← 悲嘆 ← 一ぢけな子どもたち

病床の自分もはやどうしようもない

格差社会と赤裸々に表現

下級貴族出身

エリートに官人でありながら庶民の生活に暖かい目と輝く

社会派歌人 60歳半

701 遣唐使で中国に派遣し702(大嘗元)

714(和銅7)従五位下、昇殿へ

鳥取県 716(雲霧2)伯耆守

721(春老ら)首皇子へ聖武天皇

侍講に昇格を断る

福岡県 726(神皇正統記)筑前守 筑紫歌壇

大宰帥 大伴旅人等

73歳 都へ 733(天平5)逝去

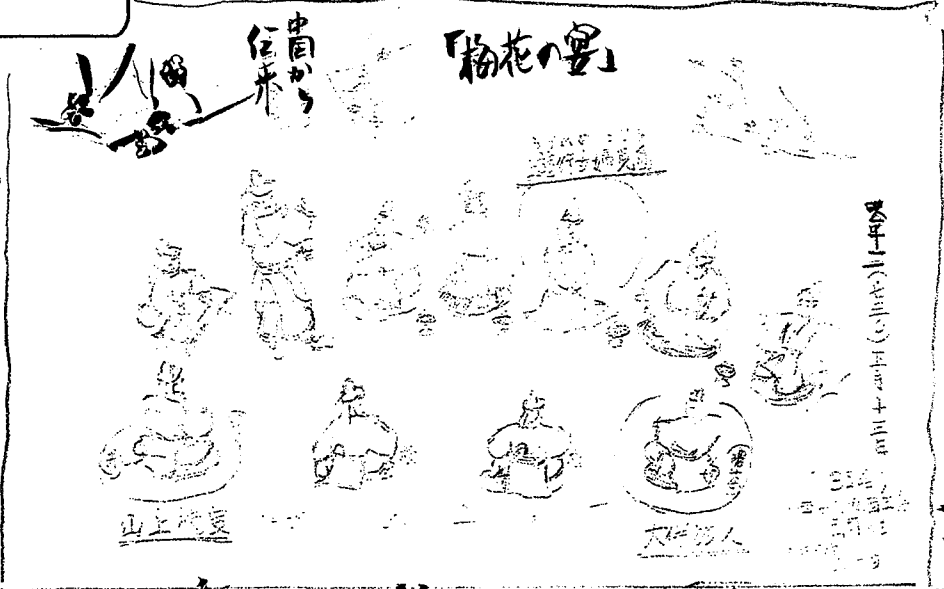
大伴旅人 67歳

病の中

酒をこよなく愛した

公卿

我が園に 梅の花散る
 ひさかたの 天より雪の
 流れ来るかも
 大伴旅人



天平二(730)正月十三日 328

天平二(730)正月十三日

同非官人

⑤

665 生年

山上憶良 71歳

欽安歌壇

大伴旅人 66歳

- 710 (和銅3) 元明天皇の朝儀 最高官位
- 719 (養老3) 正四位下
- 720 藤原不比等逝去
- 724 (神龜元) 正三位
- 728 (神龜5) 大宰帥 妻逝去 大伴旅持
- 63歳 坂上郎女

帰京 ← 729 長屋王の変

731 (天平3) 従二位大納言 正月 七月 病 薨去

平安時代

大袖を何枚も重ねる

東帯
公卿・殿上人
木袴
喜甲にかぶる進札装



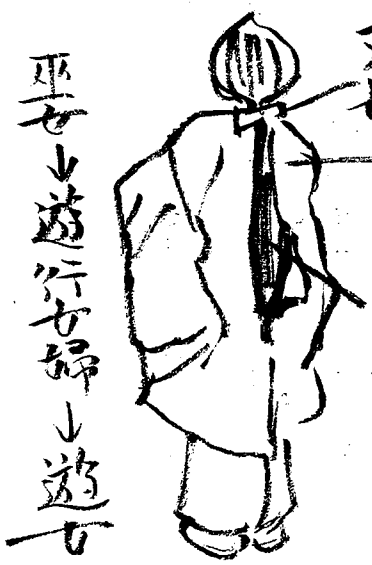
十二単
衣(袴)
単
紅の袴



烏帽子直衣
直衣
袖あき
立烏帽子
おひらき



桂
丈長
桂
下げ髪



平女↓遊行者婦↓遊女

狩衣
(民間の服)
狩衣
指貫

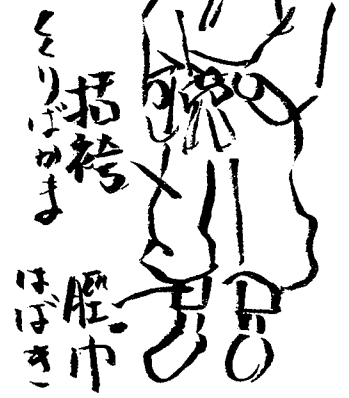


民間婦人
下襲



直垂
直垂

烏帽子



裾たつもの

公家装束

参内さんだいとは 堅めの会社出勤

口東帯 最も正式 モーニング・フロック

特殊な行事・式典のみ着用丸装

口衣冠 最も一般的 上下そろいの背広・スーツにネクタイ

出勤服 昔ながらのサラリーマンスタイル

口冠直衣 かんむりのうしろ ツタリラッグス 上着・ベスト・ブレザーにネクタイ

これでも出勤は許される

口烏帽子直衣 えぼしうしろ おしゃれ ノーネクタイにブレザー

ハインなおしゃれなさんたちの普段着

口狩衣 かりまぬ カジエール ジャケットブルゾン等 スポウウェア

あくまでもカジエールな遊び着

口直垂 ひたたん 普段着 スポウトレーナー等

いつしかみんなの普段の身近への普段着

※室町時代以降に

口小袖姿 カラーなTシャツ ミ本来は下着?

今ではほとんど一般的な普段着



衣更

立冬たふゆの時期
立夏こしげ

☆応仁の乱...公家文化は壊滅的な打撃を受けた

その後↓100年の空白期間

知識と技術が失われた



直垂



狩衣

仕事

冠直衣

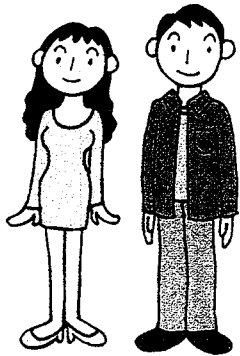
衣冠

束帯



小袖姿

烏帽子直衣



仕事



儀式

紫日記

六六

あふこ小痛をたがふ交ゆらする。あふこ

れきふちあふりまふにたあふた見り

あふたあふりまふにたあふた見り

あふたあふりまふにたあふた見り

あふたあふりまふにたあふた見り

あふたあふりまふにたあふた見り

あふたあふりまふにたあふた見り

あふたあふりまふにたあふた見り

紫日記

今宵、少輔の乳母、色ゆるる

親王の乳母として重んじられる

教成親王の乳母

禁色(の)着申す許可

ただーきんさきようちーたり

整、正

宮抱きたてまふりり

御誕生五十日目の御祝

御帳のうちにて殿の上

抱きうつーたてまつりたまひて

あざり出でさせたまへる火影の御さま

灯火に照り出された
舞の北の方の様子

けはひことにめでたー

立派な様子

赤いろの唐の御衣、地摺の御裳

うるはーくさうぞきたまへるも

もったいなくもすの
感慨深い

かたじけなくもあはれに見ゆ

大宮は葡萄染の五重の御衣

中宮彰子
大宮

小社
上皇女様の
平御着

蘇芳の御小袷たてよつれり 殿餅はまるりたまふ

道長

長い布を横につなぐ

裳唐衣 (源倫子) ^{みち} 道長の北の方 (彰子の母) 45才 小袿 (藤原彰子) ^{中宮} 道長の長女 21才

苗 ^{しとね}

に座るのは主人格

此系式部日記絵巻

あつひら 父一条帝第三子
敦成親王五十日の祝 (後一条帝)



一〇〇八(寛弘五)年 十一月一日 夕刻
土御門邸の寝殿

夫婦別姓 (父の姓)

左大臣 冠直衣 (藤原道長) 43才 唐衣 (紫式部)
御膳台に餅をのせている。
おもひ (祝)

◎紫式部 紫式部日記から

起すための 型にはまった身分・意識が高い

清少納言をパッシング

清少納言は得意顔、自慢ぶり

二トだった経験 酷評 現実からかけ離れた

ありえない空間

女瀬戸の家蔵……我が道を行く

まろめな小説家 源氏物語に共感

まろめな恋 まろめな愛

一日一日を編み物に……いく丹念さ

優等生 冷静な瞳 十深い知識

顔で笑って心で泣いて

紫式部は清少納言に對し ひとく高慢さ

はかばかしの氣風とまろやかな教養

いぬな

この二人はまろやかな、永井路子

紫式部日記絵巻